

ディスコース・ポライトネス理論から見るアイデンティティ  
 IDENTITY FROM THE VIEWPOINT OF DISCOURSE POLITENESS THEORY

宇佐美まゆみ, 東京外国語大学大学院  
 Mayumi Usami, Tokyo University of Foreign Studies

1. はじめに

アイデンティティとは、人間の様々な行動に反映されるものであるが、言語行動もその重要な要素の一つである。言語はメッセージを伝えるだけでなく、直接、間接に、アイデンティティというものを伝えるものだからである。

本稿では、言語学、語用論、言語社会心理学をはじめとする分野に多大なる影響を与えた Brown & Levinson(1987)のポライトネスの普遍理論をさらに発展させて展開させている「ディスコース・ポライトネス理論(DP理論)」(Usami, 2006, 宇佐美, 2008 etc.)の骨格を紹介した上で、言語行動に反映されるアイデンティティというものを、ディスコース・ポライトネス理論の枠組みからは、いかに分析・考察できるのかについて論じる。

ディスコース・ポライトネス理論では、Brown & Levinson のポライトネス理論の基本は評価しながらも、一発話行為にとどまらず、その対象を談話行動レベルに広げるとともに、ある行動の「フェイス侵害度」を、話し手の観点からのみならず、聞き手の受け止め方も考慮に入れて考える。そして、実際に発話する前のポライトネスの見積もりだけでなく、発話や談話が行われた後の「実際の効果」としての「ポライトネス効果」を、「話し手と聞き手の『フェイス侵害度の見積もりの差』」から、相対的に捉える。

DP理論には、①「ディスコース・ポライトネス」②「基本状態」③「有標ポライトネス」と「無標ポライトネス」④「有標行動」と「無標行動」⑤ポライトネス効果⑥見積もり差(De値)と行動の適切性、ポライトネス効果の関係、⑦「相対的ポライトネス」と「絶対的ポライトネス」の7つの鍵概念がある。本稿では、「基本状態」と「見積もり差(De値)」という概念を中心に、「アイデンティティ」というものを、少し異なる観点から考察する。

2. 「ポライトネス」の操作的定義の必要性

まず、前提として、「ポライトネス」という用語を「操作的に定義」しておく必要がある。操作的定義とは、「ポライトネス」という言葉の「語源」や「意味論的意味」、「常識的意味」を問題とするのではなく、定義した内容に相当するものが、「ポライトネス」であると捉える必要がある。B & L

(1987)の「ポライトネス」の定義を最も簡潔に表すと、「円滑な人間関係の確立・維持のための言語行動」と説明してきた。これを、より厳密に、操作的に定義すると、『ポジティブ・フェイス』と『ネガティブ・フェイス』という人間の2つの基本的欲求を満たすような言語行動」とであるということになる。人間には、対人コミュニケーションに関する2つの「基本的欲求」があるとする。他者に理解されたい、好かれたい、賞賛されたい、仲間に入れてほしいという、他者に近づきたいという「プラス方向への欲求」である「ポジティブ・フェイス(positive face)」と、他者に立ち入られたくない、他者から距離を置くという「マイナス方向に関わる欲求」である「ネガティブ・フェイス(negative face)」の2つである。「ネガティブ」とは、「否定的な」という意味でも「消極的」という意味でもない。

「ポジティブ・フェイス」と「ネガティブ・フェイス」を、それぞれ、他者に「近づきたいという欲求」と「ある程度は距離をおきたいという欲求」という「2種類の基本的欲求」として操作的に捉えることが、この理論の正確な理解に最も必要なことであり、最近では、特に、ポライトネス理論を他の応用分野に紹介する際などは、「親近欲求」、「不可侵欲求」という用語を使うこともある。B&Lは、この人間の「基本的欲求」としての2種類のフェイスを脅かさないように配慮するストラテジー群の「総称」を、「ポライトネス」と捉えた。そして、それぞれ、ポジティブ・フェイスを配慮するストラテジーを「ポジティブ・ポライトネス・ストラテジー」、ネガティブ・フェイスを配慮するストラテジーを「ネガティブ・ポライトネス・ストラテジー」と呼んだのである。B&Lの言う「ポライトネス」とは、操作的定義に基づくと、「人間の2つの基本的欲求であるポジティブ・フェイスとネガティブ・フェイスを配慮する言語ストラテジー」ということになる。B&Lの言う「ポライトネス」とは、それ以上でも以下でもない。

ディスコース・ポライトネス理論も、基本的にこのようなポライトネスの捉え方を踏襲した上で、新たに、話し手側のストラテジーとしてのポライトネスと、聞き手側から見た「効果」としてのポライトネス効果を分けて考える。言語行動として表面に表れる具体的な「ポライトネス・ストラテジー」は、当然、各々の言語・文化によって異なる。しかし、円滑な人間関係としての「ポライトネス」への欲求・動機には、普遍性があるはずであると考えるのが、「ポライトネスの普遍理論」探究者の立場である。ディスコース・ポライトネス理論の目的は、そもそもが、各々の言語・文化によって異なる「ポライトネス・ストラテジー」を生み出すに至る、その「原則の普遍性」を扱うものであるということ、強調しておきたい。また、そのような捉え方に、既にディスコース・ポライトネス理論が、言語理論ではなく、「人間の社会的行動の理論」であることが反映されていると言えるだろう。

「ポライトネスと異文化間コミュニケーション」で問題となるのは、話し手側がとる「ポライトネス・ストラテジー」の文化による違いとともに、それを聞き手側がどのように受け止めるかということも関係する。ディスコース・ポライトネス理論は、話し手がいかにポライトネス・ストラテジーを選択するかという原則だけでなく、話し手の選択したポライトネス・ストラテジーを聞き手がどのように受け止めるかという「ポライトネス効果」の観点も加え、その原則を示したものでもある。そういう意味で、ポライトネス・ストラテジーとその受け止め方の文化による違いが引き起こす異文化間ミス・コミュニケーションにおける摩擦や「アイデンティティ」の問題など、様々な問題の解決の糸口を導くヒントにもなるものなのである。

### 3. ディスコース・ポライトネス理論 (DP 理論) の概要

本節では、ディスコース・ポライトネス理論 (DP 理論) の概要を簡単に紹介する。ディスコース・ポライトネス理論には、以下の7つの鍵概念がある。以下、それぞれについて簡単に解説する。

#### ⊖ 「ディスコース・ポライトネス (discourse politeness)」

『ディスコース・ポライトネス』とは、一文レベル、一発話行為レベルでは捉えることのできない、より長い談話レベルにおける要素、及び、文レベルの要素も含めた諸要素が、語用論的ポライトネスに果たす機能のダイナミクス<sup>1</sup>の総体である」(宇佐美 2001, 2003)と定義される。また、特定の「活動の型」の「典型的な状態にある談話の総体」も指す。

#### ⊖ 「基本状態 (default)」

「基本状態」とは、一般的な用語で言うと、特定の言語文化や活動の型における「典型」、「プロトタイプ」、「スキーマ」などに共通する捉え方である、ただ、DP 理論に特化した説明の仕方をすると、以下のようになる。

「基本状態」には、以下の2種類がある。1つは、「特定の『活動の型』における談話の『典型的な状態』」を指し、「談話の基本状態」と呼ぶ。また、もう1つは、「その談話の基本状態を構成する要素としての『特定の言語行動や言語項目それぞれの典型的な状態』」を指し、「談話要素の基本状態」と呼ぶ。前者は、理論的観点から想定するもので、談話内の諸要素を特定するものではない。後者の「談話要素の基本状態」とは、実証的研究においては、個々の研究において研究対象として設定した要素について、同定・算出するものである。例えば、数多くの同じ活動の型の「典型的な状態の談話」における「主要な言語行動の構成比率 (分布) の平均値や平均的傾向」、「各々の要素の生起率の平均値平均的傾向」、「談話展開パターンの典型」の算出・同定などがある(宇佐美 2008)。また、一般的に広く受け入れられている傾向や特定の活動の型における典型であれば、いちい

ち要素の数を数えて基本状態を算出・同定するという手続きを経なくても、例えば、「社会人の初対面会話」では、敬体が基本スピーチレベルであると想定して、そこから離脱する有標行動の機能を分析してもよい

- ⊗ 「有標ポライトネス (marked politeness)」と「無標ポライトネス (unmarked politeness)」

Brown& Levinson(1987)のポライトネス理論におけるポライトネスは、基本的には、依頼行為などのように、相手のフェイスを脅かす「フェイス侵害行為」を行わざるを得ないときに、「相手のフェイス侵害度を少しでも軽減するためにとるストラテジー」として捉えられている。このような「フェイス侵害度の軽減行為」としてのポライトネスを、ディスコース・ポライトネス理論では、「有標ポライトネス」と呼ぶ。

しかし、このように、「相手のフェイス侵害度を軽減するためにとるストラテジー」としてのみポライトネスを捉えると、フェイス侵害行為 (Face Threatening Act: FTA) が生じていない状態にある「日常会話 (ordinary conversation)」などにおける「ポライトネス」をうまく説明できないことになる。そのため、我々の日常生活には、「フェイス侵害度軽減行為」とは異なるタイプのポライトネスもあると捉えることが必要になる。それは、「特定の状況や場面において期待されている言語行動」と関係する。特定の状況で、「あつて当たり前で、それが現れないときに初めてそれがないことが意識され、ポライトではないと捉えられる」という類のものである。このようなタイプのポライトネスをディスコース・ポライトネス理論では、「無標ポライトネス」と呼ぶ。先に説明した談話の「基本状態」は、「ポライトネス」の観点からは、「無標ポライトネス (相手のフェイスを侵害しない状態)」であると捉えることができる。

ディスコース・ポライトネス理論では、「ポライトネス」をこのような、フェイスの侵害が生じていない状態にある日常会話における「基本状態としてのポライトネス(無標ポライトネス)」も併せて、より体系的に捉えるものである。そのために、ポライトネスを、「有標ポライトネス」と「無標ポライトネス」とに分けて考え、それぞれを体系的に理論に組み込んでいる。

- ⊗ 有標行動 (marked behavior) と無標行動 (unmarked behavior)

談話の「基本状態」は、ポライトネスの観点からは、「無標ポライトネス」である。そして、談話の「基本状態」を構成する要素としての言語行動を「無標行動」、各々の要素の基本状態から離脱する言語行動、或いは、基本状態とは異なる談話レベルから見た一連の行動を、「有標行動」と呼ぶ。

ディスコース・ポライトネス理論では、特定の談話の「基本状態」は、ポライトネス効果を相対的に捉えるために同定する必要があるものであると捉える。つまり、各々の談話と、それを構成する諸要素の「基本状態」を基

にして、そこからの有標行動の「動き」や「有標性(基本状態からの離脱度)」に着目して、「相対的ポライトネス」の体系化を試みたものである。

⑤ ポライトネス効果 (politeness effect)

談話の基本状態を構成する諸要素は、無標行動、つまり、あって当たり前のものとして、ディスコース・ポライトネスを形作っている。この「基本状態」は、各々の要素の状態としても、複数の要素の分布の状態(異なるスピーチレベルの構成比率等)としても、そして諸要素から構成される談話の総体(ディスコース・ポライトネス)としても、ポライトネスの観点からは、「最適の状態」、或いは、「最も自然な状態」としての「無標ポライトネス」であると捉えられる。それ故に、もし、談話の基本状態を構成する要素の何か欠けた場合や、或いは、何かが多すぎる場合、それが意識され、ポライトでないと感じられたり、その他の何か特別の効果が生まれると想定するのである。

ディスコース・ポライトネス理論では、「ポライトネス効果」とは、「談話の基本状態や話し手の言語行動、選択されたストラテジーに対する話し手と聞き手の『見積もり差 (Discrepancy in estimations: De 値)』によって引き起こされる聞き手側からの認知」を表す。話し手と聞き手の「見積もり差」については、次の⑥で詳説する。ポライトネス効果には、以下の3種類がある。すなわち、a.プラス効果、b.ニュートラル効果、c.マイナス効果である。これらは、言い換えると、a.心地よい、丁寧だと感じるという効果、b.ニュートラルな効果(ポライトネスの観点からは、特に丁寧と感じるわけでも不愉快でもないこと。ただ、強調や話題転換などのように、言語的談話効果等を生んでいる場合がある。) c.不愉快な、失礼だと感じる効果である。

⑥ 「見積もり差 (Discrepancy in estimations) : De 値」と「行動の適切性 (appropriateness of behavior)」、「ポライトネス効果 (politeness effect)」の関係

上述した3種類の話し手と聞き手による「見積もり差(De 値)」は、もちろん、絶対的な数値として算出できるわけではないが、0を挟む-1から+1までの一つの連続線上に分布すると仮定することによって、体系的に捉えることができる。と考える。「見積もり差 (De 値)」と「行動の適切性」、「ポライトネス効果」の関係は、以下のようになる。

見積もり差 (Discrepancy in estimations: De 値) :  $De = Se - He$

Se : 話し手 (Speaker) の「見積もり (estimation)」

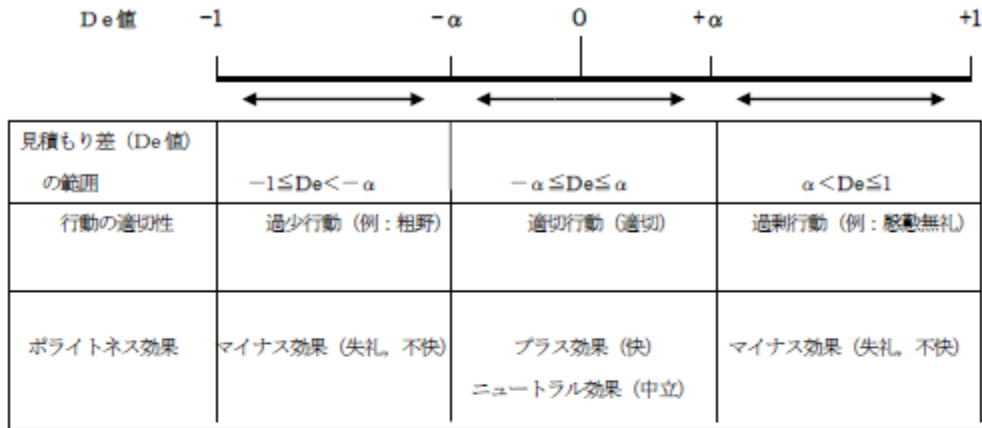
He : 聞き手 (Hearer) の「見積もり (estimation)」.

$\alpha$  : 許容できるずれ幅

「見積もり (estimation)」には、以下の3種がある。見積もり差 (De) は、この3つの観点のいずれか、或いはすべてが関係して生じると考える。

- a. ある有標行動の「フェイス侵害度」の見積もり
- b. 「談話の基本状態」が何であるかについての見積もり
- c. 「フェイス侵害度に応じて選択されたポライトネス・ストラテジー」についての見積もり

これらを図示したものを、以下の図1に示す。



見積もり差 (Discrepancy in estimations: De 値) :  $De = Se - He$

Se : 話し手 (Speaker) の「見積もり (estimation)」 (以下の\*参照). 仮に, 0から1の間の数値で表すものとする.

He : 聞き手 (Hearer) の「見積もり (estimation)」. 仮に, 0から1の間の数値で表すものとする.

α : 許容できるずれ幅

\* 「見積もり (estimation)」には, 以下の3種がある. 見積もり差 (De) も, この3つの観点のいずれか, 或いは, すべてが関係して生じると考える.

- ① ある有標行動の「フェイス侵害度」の見積もり
- ② 「談話の基本状態」が何であるかについての見積もり
- ③ 「フェイス侵害度に応じて選択されたポライトネス・ストラテジー」についての見積もり

図1 「見積もり差 (De 値)」, 「行動の適切性」, 「ポライトネス効果」

話し手と聞き手の「見積もり差」が, 0か, 「許容できるずれ幅 ( $\pm \alpha$ )」の範囲内に収まる行動は, 「行動の適切性」の観点からは「適切行動」とみなされ, 不快感をもたらさない. つまり, ポライトネス効果の観点からは, プラス効果を生むか, ニュートラル効果になる. また, 話し手の見積もりが聞き手の見積もりよりも, 「許容できるずれ幅 ( $\alpha$ )」を超えて少ない場合, それは, 行動の適切性の観点からは「過少行動」となり, ポライトネス効果の観点からは, マイナス効果 (失礼, 不快) を生む. 逆に, 話し手の見積もりが, 聞き手の見積もりよりも, 許容できるずれ幅 ( $\alpha$ ) を超えて多い場合, それは, 行動の適切性の観点からは「過剰行動」となり, ポライトネス効果

の観点からは、マイナス効果（慇懃無礼，失礼，不快）を生むことになる。

これまで、敬語研究などでは、あまり扱われてこなかった「慇懃無礼」は、ディスコース・ポライトネス理論で解釈すると、「話し手が、聞き手が当該の状況で適切であると考えた言語行動よりも『許容できるずれ幅 $\alpha$ 』を超えて『丁寧な表現』を使用した」場合であると解釈できる。つまり、「話し手が、聞き手が当該の状況において期待する『図1に示した「見積もり」に応じた言語表現』よりも、『許容できるずれ幅 $\alpha$ 』を超えて『丁寧すぎる表現』を用いた場合）」であるということになる。

ここで、3種の「見積もり差」について、もう少し説明しておく。a.の「ある有標行動の『フェイス侵害度』の見積もり」における話し手と聞き手の見積もり差とは、B & Lのフェイス見積もりの公式 ( $W_x = D(S,H) + P(H,S) + R_x$ ) に基づくもので、その見積もりを、話し手のみならず、聞き手も同様に行うと想定し、両者が見積もりが同じか否か、ずれる場合は、そのずれが許容できる範囲( $\pm\alpha$ )を超えているか否かで、ポライトネス効果が決まってくると捉えることは、先に説明した通りである。しかし、B&Lの理論では、それを一発話行為レベルごとに適用していくことになる。例えば、先にも例にあげたように、このところ毎週末、ゴルフに出かける夫を快く思っていない妻が、普段は、ほとんど常体で話しているにもかかわらず、「まあ、明日もゴルフでいらっしゃいますか」( $W_x$ が大きい)という発話を行った場合、普段の会話から夫が期待している(見積もっている)、「明日もゴルフなの」の $W_x$ と、その大きさが異なることになる。妻のほうは、あえて、(皮肉のニュアンスを出すために)、距離(D)やゴルフに行くという行為( $R_x$ )を高く見積もったかのように、「いらっしゃいますか」を使ったわけだが、夫のほうは、距離(D)もゴルフに行くという行為( $R_x$ )も、いつも通りに、それほど高くなく見積もった。よって、「明日もゴルフなの」くらいの表現を期待した(見積もった)わけである。その「見積もり差」、すなわち「ギャップ」が、一般的な意味での「許容できるずれ幅( $\pm\alpha$ )」を超えているため、聞き手としての夫は、「まあ、明日もゴルフでいらっしゃいますか」という発話を、ポライトだと捉えるのではなく、むしろ、嫌味だと捉える、というように解釈するのである。つまり、妻の発話は、図1の $+\alpha < D_e \leq 1$ の場合に当てはまり、「行動の適切性」の観点からは、「過剰行動」、ポライトネス効果の観点からは、マイナス効果となるのである。

これとは異なり、b.の「『談話の基本状態』が何であるか」についての見積もり差というのは、例えば、「ある状況(「初対面会話」)という活動の型の典型(常識的規範とも言える)をどのようなものと捉えているか」という見積もり(期待)が、話し手と聞き手で異なるということである。つまり、「初対面会話では、敬体を基調として話すのが一般的である」というような捉え

方自体のことである。仮に、聞き手のほうは、そのように捉えているが、両者が大学生である場合などは、個性によって、例えば、話し手のほうは、「若い大学生同士なのだから、初対面でも最初の挨拶などの後は、常体で話したほうが親しみが出るし、それが普通である」と考えている場合もあり得る。

このように、そもそも、どのような状態を「談話の基本状態」と捉えるかという段階で、話し手と聞き手の「見積もり（みなし、期待）」が異なっている場合があるということである。DP理論では、「談話の基本状態」を基準として、ある発話の効果が決まってくると考えるわけであるから、ある発話が、基本状態を構成する要素（初対面会話における敬体）に適合するものかそうでないかによって「ポライトネス効果」が異なってくる。この例の場合、聞き手は、初対面会話のスピーチレベルの「基本状態」は、敬体であると考えているが、一方、話し手のほうは、初対面会話でも大学生同士などの場合は、基本状態は、常体である（或いは、常体でもいい）と捉えているとみなすことができる。その両者が初対面で話した場合の「ポライトネス効果」は、聞き手の視点から捉えるので、聞き手は、フェイス侵害度（ $W_x$ ）をより高く見積もっているが、話し手は、聞き手の見積もり（期待）より、 $W_x$  を低く見積もり、その見積もりに応じて、常体を選択していると考えられる。そこで両者にギャップが生まれる。そして、そのギャップが、「許容できるずれ幅（ $\pm \alpha$ ）」を超えている場合は、聞き手は、「なれなれしい、失礼だ」という印象を持つことになり、「ポライトネス効果」の観点からは、「マイナス効果」となる。つまり、この場合は、図1の「 $-1 \leq De < -\alpha$ 」の部分にあたる。行動の適切性の観点からは、「過少行動」、ポライトネス効果の観点からは、マイナス効果となる。この場合は、単に一発話行為レベルで、 $W_x$  を見積もる場合と異なり、基本スピーチレベルが敬体になっているか、常体になっているか、つまり、どちらが50%を超えているかを、ある特定の談話のスピーチレベルを数えて同定するというプロセスを踏むことになり、B&Lのポライトネス理論では、明確に理論化されていなかった「談話レベルの見積もり」を含むように発展させている。そういう意味でも、DP理論は、談話レベルのポライトネス理論と位置づけることができる。

最後に、3つめの話し手と聞き手の見積もり差に関して説明する。a.の発話行為レベルの「フェイス侵害度」も、b.の「談話の基本状態」を元にした上でのある言語行動のフェイス侵害度の見積もりも、その大きさに応じた具体的な「表現」までは特定しているわけではなく、また、1つに限られるわけではない。そのため、仮に、話し手と聞き手が、同じ程度の「フェイス侵害度」を見積もったとしても、最終的に話し手が選択した言語表現を、聞き手のほうが、その見積もられたフェイス侵害度にふさわしい「言語表現」と捉えるかどうかという段階で、ずれが生じる可能性もあるということである。



それが、c.の「フェイス侵害度に応じて選択されたポライトネス・ストラテジーについての見積もり差」である。

このように、実際の「ポライトネス効果」は、「談話の基本状態が何であるかという見積もり」、「特定の言語行動に対するフェイス侵害度の見積もり」、及び、「フェイス侵害度に応じて選択されたポライトネス・ストラテジー(言語表現)の見積もり」の、いずれか、或いは、すべてにおける、話し手と聞き手の「差(ずれ)」から生まれるという「相対的観点」を、より具体化して理論の体系に組み込んだということも、ディスコース・ポライトネス理論において初めて取り入れられた新しいポライトネスの捉え方である。このような観点は、「異文化接触場面」でしばしば生じる誤解に基づくミス・コミュニケーションの問題を記述、解釈する際の一つの枠組とも成り得る。

⑦「相対的ポライトネス (relative politeness)」と「絶対的ポライトネス (absolute politeness)」

最後に、「相対的ポライトネス」と「絶対的ポライトネス」についてまとめる。言語形式について言うなら、「行く」より「いらっしゃる」のほうが丁寧度が高いとか、その他の条件が一定ならば、直接的表現より間接的表現のほうが、より丁寧であるというような捉え方は、「絶対的ポライトネス」を扱っていると言える。しかし、現実には、いつも常体で話す相手(スピーチレベルの「基本状態」が常体)に「敬語」を使うと、かえって皮肉や嫌味になるというように、たとえ、敬語を使っているとしても、「マイナス効果」を生むこともある。つまり、常体が無標スピーチレベルである談話において「有標行動」となる敬体を使用することは、言語形式自体は「敬体」であるにもかかわらず、相手に失礼だと感じさせたり、不愉快にさせたりするというような「マイナス効果」を生み得る。一方、仲間意識を高めるために用いる「ため口(友達同士の言葉遣い)」は、言語表現の丁寧度は低くても、プラス効果として機能することもある。

つまり、実質的に「ポライトネスの効果」を生み出すのは、「言語形式」それ自体の丁寧度ではなく、ある特定の「談話」の「基本状態」からの離脱や回帰という言語行動の「動き」であるのである。そして、その「ポライトネス効果」は、特定の場面においてどのような言語行動が適当であると考えているかという「基本状態の認識」、「当該の言語行動や談話行動のフェイス侵害度」、及び、「フェイス侵害度に応じて選択されたポライトネス・ストラテジー」の3つのうちのどれか、或いは、すべてにおける話し手と聞き手の「見積もり差(ずれ)」から生まれるということが分かる。これが、「相対的ポライトネス」という捉え方である。上述したように、ディスコース・ポライトネス理論は、対人コミュニケーションにおけるポライトネスをより広い観点から捉えて体系化しようとするものであり、円滑な人間関係を確立・維

持するための言語行動としてのポライトネスだけではなく、「失礼」「無礼」「慇懃無礼」「皮肉」といった行動も、マイナス・ポライトネスとして、同一の枠組みで捉えるものである。

#### 4. ディスコース・ポライトネス理論から見るアイデンティティ

最後に、言語行動に反映されるアイデンティティに関する仮説と DP 理論の枠を用いた研究方法の試案について述べたい。簡潔に言うと、DP 理論の観点からは、アイデンティティの「一面」は、自分の帰属意識が最も強い言語文化の（言語）行動の「基本状態（デフォルト）」、「無標行動」に合わせようとするか、あえて、その文化では典型とは言えない「有標行動」をとるか、というある個人の意識的、無意識的な「行動の選択」に反映されると考える。このような選択行動は、すべての行動に同じように反映されるのではなく、「活動の型」によって異なると予想する。研究方法としては、まずは、特定の「活動の型」に絞って、ある個人の行動傾向が、A 文化的か B 文化的かを同定する。それを複数の活動の型で見ると、ある行動は、A 文化的だが、別の行動は、B 文化的だというような行動傾向が見えてくるかもしれない。そして、それらが、どのような「アイデンティティ」を反映しているものなのかを考察していくのである。「アイデンティティ」というものは、すべて全体的で一様に決まっているものではなく、相手や場面、活動の型に応じて表出されるものであり、相対的、流動的、且つ多面的なものである。目的に応じて、状況を限定し、対象とする言語行動を分析することによって、「アイデンティティ」を構成する要素の特徴が、その一端ではあるが、より具体的に見えてくると言えるだろう。

付記：「ディスコース・ポライトネス理論」の骨格等については、内容柄、筆者自身の他の論文と重なるところがあることをお断りしておく。

#### 引用文献

- Brown, P. & Levinson, S. C. (1987) *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge; New York: Cambridge University Press.
- Usami, Mayumi (2006) *Discourse politeness theory and second language acquisition*. In Wai Meng Chan, Kwee Nyet Chin and Titima Suthiwan. (eds.) *Foreign Language teaching in Asia and beyond: Current perspective and future direction*. 45-70. De Gruyter Mouton.
- 宇佐美まゆみ (2008) 「相互作用と学習ーディスコース・ポライトネス理論の観点からー」『講座社会言語科学(教育・学習)』, 西原鈴子・西郡仁朗編, vol.4, ひつじ書房, 東京, 150-181.